4月8日の礼拝メモ　　イースター礼拝

『キリストの復活が我らを救う』

ローマ人への手紙 10:9～13

神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、
あなたは救われるのです。

序〕

イースターとは9節にあるように、「神がイエスを死者の名からよみがえらせてくださった」日である。ここには復活のことしかふれていないが、常に十字架と復活は一つ。今朝は「復活」と救いの関連を学ぶ。

本〕

Ⅰ熱心の方向を誤ってはいけない(2,3)

9節最後に「信じるなら救われる」とある。この「救われる」ということを素直に受け取れない人が多い。聖書の「救い」とは“人間としての原点に帰る”という意味である。本来、人間は神に造られたのに、それを見失ったため、何に向かって人生を費やせばよいかわからなくなった。この心の空洞を埋めるために、金儲けに熱中したり、仕事に没頭したりする人がいる。あるいは修行や勤行という行ないに熱心になる人もいる。ユダヤ人も律法に熱心であった。「熱心が悪いのではない。方向が誤っている」パウロは指摘する。2節の「その熱心は知識に基づいたものではない。」この場合の「知識」とは神のみこころ。彼らは何を知らなかったのか？「彼らは自分自身の義を立てようとし」た。これが罪である。我らの礼拝の動機は何か？自己義の追求か？礼拝は神のみこころを追求する熱心が必要。

Ⅱすでに救いは備えられている(4～8)

ユダヤ人たちは聖書を知らなかったわけではない。知っていたが自己義に生きようとした彼らは、その聖書に書かれている救いについては見失っていた。だから、パウロはそのことを気づかされる意味で、「みことばはあなたの近くにある。」(8)と訴えた。我らはどうか。毎週、聖書をもち、礼拝に来ていながら、御言を知らないことはないか。御言に救いが記されている。

Ⅲ救いは信仰のみ(9,10)

①まず心で信じること。“心で”とは全人格をもって。信じる内容は「神がイエスをよみがえらせた」こと。イエスは我らの罪のために十字架に架かられ、三日目に復活して今も生きておられる。信じる者の心中に住み、信じる者の力となる。

②口で告白すること。イエスを主と告白するとは、自分がキリストのしもべであることに満足すること。この種の信仰は「知識のない熱心」＝熱狂にならない。主を信じると人間本来の姿に回復される。

結〕

「彼に信頼する者は、失望させられることがない」「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」これらの“みことば”を単純に信じよう。